



ユース版

「中・高一貫教育」を検証する その2

By Dr Fiona Ninnes (屋代高校・附属中初代ALT)



オーストラリアのご出身、平成22~27年度の5年間、屋代高校・附属中学で英語を教えられた。この間Exploring Timorese Perspectives of the Australian/Timorese Friendship Agreementsで博士号(Phd)を取得。平成28年(2016年)にオーストラリアに帰国され、その後英語教師の学位(TESOL)を取られ、現在メルボルン市内の会社で「教育コンサルタント」(independent educational consultant)の仕事をしている。

Reflections about Yashiro

Learning is something that we do from the time we are born to the time we die. Learning can be uplifting and exhilarating. However, it can sometimes be a torment and a torture. Most of us are forced to go through a formal education system during our childhood and early adolescence. While some students sail through schooling without any difficulty, the formal education systems do many of us a great disservice by making learning a task to get through rather than something that we look forward to and enjoy. Testing and exams are often used as a measure of students' success. However, regardless of which country you live in, the problem with putting faith in exam results for academic success means that students are often 'taught to the tests' and not taught to become independent and enthusiastic learners.

I am sure that many people are aware that the students getting into Yashiro High School's attached junior high school were usually highly successful students in elementary school. They are students who were used to succeeding within the education system. However, when put together, they can't all be first. This means that highly motivated and successful students may experience 'coming last' and/or failing. Constant testing and ranking can kill the desire to learn. These academic stresses also come at a time when the students are going through puberty and trying to make sense of who they are in the world. It is little wonder that some of them find it all too stressful and withdraw from the formal schooling system.

The Junior High School attached to Yashiro High School has the potential to improve education within Nagano Prefecture and improve the lives of all its students. However, there is a danger, if teachers are not allowed to break educational traditions, that some students' lives will be damaged by the weight of expectations placed on them. Too often, if a student fails a test or gets a bad grade on an assignment, the student is blamed for not doing enough work. I would love to see Yashiro High School's attached junior high school make a radical change by eliminating all testing and ranking.

I recently watched this YouTube clip https://www.youtube.com/watch?v=dk60sYrU2RU&feature=youtu.be called New experiments in self-teaching - a TED talk by education scientist Sugata Mitra. It is absolutely fantastic. I would encourage one of the Yashiro English teachers to put Japanese sub-titles on this clip and have all the teachers and parents watch it. The most powerful message from this video is - if children have an interest, education happens! Our job as educators and parents is not to kill the interest.

編集室から懸賞問題

フィオナ先生の論文に関心のある方は、「屋代高附属中生として、主体的に中学生を送る上で留意すべき点」について、300字数程度の日本語でまとめてみて下さい。屋代高・中の生徒ならどなたでも応募できます。締切りは8月9日(金)、提出は「鳩陵会館」まで。最優秀賞1名：賞状+図書カード10,000円、優秀賞2名：賞状+図書カード7,000円、入賞3名：賞状+図書カード5,000円

「第26回信毎賞」(2019.6月)の国際的鳥類学者 中村浩志・信州大名誉教授



埴科郡坂城町のご出身、高校第17回のご卒業。信州大学教育学部で鳥類学者・羽田健三教授に師事。京都大学大学院に進まれ「カワラヒワの個体群と社会構造に関する研究」で理学博士。信州大学助手、助教授を経て、平成4年(1992)年に教授。同24年(2012)退任後も特任教授として、絶滅に瀕するライチョウの繁殖集団を復活する取り組みにより保護活動に務めた。カッコウの研究では山階芳麿賞(平成14年)、ライチョウの生態保護で環境大臣賞(同23年)等を受賞。現在は中村浩志国際鳥類研究所代表理事。

クローズアップ

○高校時代は地歴班で活躍されたとお聞きしましたが、「地歴に関心を持ったのは、中学時代(坂城中)、近所の縄文遺跡から土器や矢じりが出てきたことからでした。大学でも考古学をやりたいと思って信州大学に入学しましたが、専門の先生がいらつしやらなかつた。そこで生物学に向かうようになった訳ですが、こういうところが人生の妙で面白いですね。」

○高校時代の思い出は、やはり地歴班の活動ですか。「はい。この地域周辺の発掘調査に先輩・後輩皆さんと汗を流しました。3年では班長

を務め、千曲市冠着山麓の幅田遺跡、塩崎の弥生時代の遺跡、屋代の条里制の発掘などが懐かしい思い出です。現在は「更級の里・縄文祭」が行われていますが、高校2年の昭和38年に発掘活動に参加した幅田遺跡(5500年前の縄文中期)の調査結果が、その基礎になっていると思われま

○ご幼少期の千曲川での魚釣りや、木登りのお話をよく聞かれますが、「千曲川での魚釣りや、木登りの原体験が、50歳過ぎてからその有り難さを実感しています。自分が世界的な業績を上げられたのも、木登りが得

意であったからです。カッコウの生態がなかなか分からなかつた理由は、その卵が木の高い所に生みつけるため、私は木登りの体験から、後に「ナカムラメソッド」(Nakamura Method)と命名された独自の研究方法を開発しました。これにより研究が飛躍的に進み、「カッコウの托卵(たくらん)研究」分野で世界の学者を驚かせることができました。知識や学問は後天的に身に付きますが、感性というものは、幼年期に自然の中で育つものですね。」

○年間90日は山に登っておられるとお聞きしました。ク

マなど野生動物に出会うことはありませんか。「よくありますが、私たちは北アルプス乗鞍岳など、標高の高い見晴らしの良い場所での研究活動をしていますので、お互い視界が良いわけですね。そうすると、クマも驚くことがなく、脇を通りすぎていく感じがします。欧米のライチョウは、人を恐れますが、日本のライチョウは恐れません。山岳信仰の中で「神の鳥」として育つて、狩猟の対象ではなかつたものですね。人間を信じているのですね。日本文化が背景にあるライチョウを守る意義がここにあります。」

数学で忘れられないのは「青チャート」の恐怖です。学校では本来大学受験教材の青チャートを中一から使用していました。そのあまりの難度は、テスト勉強として青チャートを解く苦し

連載・私の附属中時代(その八)

「何事にも挑戦していこう」

東京大学文科Ⅲ類

下村 琢 真君 (高校第71回卒)



長野市立共和小学校出身。中・高校時代は天文班と地歴班に所属。平成31年4月に東京大学文科3類に進学し、現在「東大模型部」員。「専攻を決めることなく文理幅広い講義を取れる東大教養学部は、「広く浅く」が好きな自分に好都合」と語る。

はじめに、附属中生へ。高校受験を気にせず、中学3年間を自由に使える、さらにその3年間は思春期の頂点を迎える時期でもある……。興味関心や感情が大きく、そして頻繁に変動する中で、思ったこと、やりたいことを出来る範囲でどんどん試すのがいいと思います。たとえそれが失敗しても、まだまだ修正は効きます。あとで振り返りたくない過去として残っても、それは貴重な経験値となつてその先の人生を創ってくれるでしょう

私は2期生として附属中に入りました。中学生活については勉強面しか語れることがなかつたので、鮮明な英数の思い出を記すこととします。英語は周囲に影響されたのがきっかけでした。英検経験者(当時は英検Ⅱすい、でした)やとんでもなく発音がいい人がいて。その中で、自分もこうなつてみたい、という小さな憧れがありました。外国語が喋れると強者感ありそう。英検を取ればそうなれると思つた私はひたすら英語を勉強しました。中一末、4級すら苦戦していた私が中三の夏には2級を取得しました。結局、読み書きはできて会話力は向上せず、そのまま今に至るわけですが：笑

みでお腹を壊すようになった程度でした。私が文系を決めたのも、そこで限界を悟つたためです(本当はそういう決め方は良くないのですが)。しかし、文系で数学は大きなアドバンテージです。さつとこの地獄のおかげで数学に慣れたのでしよう、私は、数強・文系として高校を過ごし、受験を戦い、東大までたどり着きました。

そんな私が文科3類にいるのは戦略的な事情があり、「東大に入る」手段としての文三志望でした。ではなぜ東大か?という点、広いからです。東大は2年まで「前期教養学部」です。特に専攻を決めることなく文理幅広い講義を取れるこの期間は、「狭く深く」よりも「広く浅く」が好きな自分には好都合でした(もちろん講義は浅くないですが)。また、当然学費等の現実的な理由も含まれますが、割愛します。

同学年からたつた人で入学した東大は、正直かなり過酷でした。塾や予備校、進学校からの団体合格者の中で感じる孤独。彼らは知識量も比にならなかつた。それでも皆親切なおかげで、日々充実した生活ができています。講義は先生ごとに特色が強いです。時折入る余談も多様で面白く、新たな知識も多く吸収できます。ただ、試験や単位に怯える一面は高校と似ていますが：笑

令和元年度スタート 新任教頭・副校長先生に お聞きする



教頭先生は
音楽家！
教頭 山岸 明先生

1 これまでどんな学校等に勤務されたのですか。
下諏訪向陽―松本美須ヶ丘―上田―県教育委員会・高校教育課―同教学指導課、そして全国高校総合文化祭推進室・主任指導主事から着任しました。

2 ご専門分野は、どんな方面ですか。
数学で言えば、代数学です。3 「趣味は何かがでしょうか」音楽鑑賞でクラシックが中心です。

【編集部注】

山岸明教頭先生は、吹奏楽界では、知る人ぞ知るで、松本美須ヶ丘高校ご勤務時代（平成9年～18年）に、東海大会金賞・普門館に3年連続出場という偉業を達成され、「美須ヶ丘吹奏楽」を確立された先生。吹奏楽のご指導で「大切にさ

東京大学応援部の主将になった 宮下 達朗 君



戸倉上山田中出、高校第67回（普通科）剣道班で活躍され、インターハイ出場。高校1・3年には全国高校選抜大会に、また3年生では、全日本都道府県対抗剣道優勝大会に出場。平成28年4月東京大学文科1類に進学し、現在法学部の4年生。

○まずは、東大応援部の組織について教えて下さい。
「リーダーが11名、吹奏楽団が27名、チアリーダーが27名の総勢65名です。」

○高校時代の剣道から、大学では応援部。動機は何でしたか。
「1年の野球春季リーグ戦で早大戦を見に行くだけのつもり

を過ごしてもらいたいと思います。今後の課題等について伺います。屋代がどう、ということでもなく、時代の変化（人間の社会性の変化）に順応する、フレキシブルな学校システムの構築が急務だと思っています。



長野 マラソン常連
副校長 宮島卓朗先生

1 これまでどんな学校等に勤務されたか。
長野・茅野・松本・上田の各市等の小・中学校―信州大附属松本小、そして県教育委員会教学指導課・主任指導主事から着任しました。

2 専門とされる分野はどんな方面か。
国語科の教員です。遠い昔、大学では、国語学を専攻していました。教員になり、「ごんぎつね」の新見南吉や「やまなし」の宮沢賢治など、授業研究したことは楽しかったです。それぞれの故郷にも、何回か行きました。

3 趣味は？
ジョギングです。走っているときに（速くはありませんが）、いろいろと考えることが楽しいです。週に3回は、自宅から3kmほどにある信濃国分寺（上田）まで走り、参拝をしています。

4 着任した所感。
中学も高校も、挨拶が素晴らしい、大変気持ちのよい学校だと感じました。また、自分が何をやるためにこの附属中学校に來ているかをもって生徒たちと感ずりました。

5 中学生への期待。
「自分の秤」をもってほしいです。その「自分の秤」を少しずつ大きくしていつか、日々と願っています。また、日常的に「問い」をもってほしいです。どんどんと「？」を見つけて、自分なりに「解」を導き出してほしいと願っています。

6 今後の課題。
自分への課題…伸びる生徒をさらに伸ばす、多様な生徒にきめ細かな指導をする、の働き方改革を進めるには、どうしたらいいか、が自分の課題です。

だつたのが、そこで見た光景が、応援部員の泥臭さ、がむしゃらに応援する姿でした。東大生らしくない、気取ったところのない温かな人間性に惹かれたのが動機です。」

○大学の運動部は、かなり厳しいと聞いています。勉強との両立で、4年間で卒業できそうですか。また、就職試験では、「応援部主将」のことなど話題になるものですか。
「練習は、やはり厳しいものがあり、1年生の同期は7名いましたが、残ったのは4名です。辛い時期としては、何事もそうですが、初めの1年生から2年生になる頃でした。はい、4年間で卒業できました。就職は日本銀行に決まりました。NHK、読売新聞社からも内定を頂きましたが、第二志望のところに

お世話になることにしました。面接試験では、「応援部の話だけ」という感じでした。」

○大学野球の春季リーグ戦は、東大は接戦もありましたが、10連敗に終わりましたが、「応援が選手の力になっていくのかと、自問することはありますが、それでも選手から「聞こえているよ。ありがと。」と言われることで実感できます。東大を応援したい気持ちを一般の学生にもっと浸透させたいです。今年度の方針を「愛を形に」としましたが、応援したいという気持ちの前提には、人が好きという気持ちがあります。顧みてつらいことはたくさんありましたが、選択した道に間違いはありません。まだ秋季リーグが残っています。神宮球場に応援に来て下さい。」

附属中学校 新任先生の紹介

- ①これまでの勤務校 ②大学での専門分野 ③ご趣味等
- ④着任所感 ⑤附属中学生への期待

1年A組

- ①戸倉上山田中―坂城中―柳町中―辰野中
- ②日本文学
- ③映画鑑賞、キャンプ
- ④やる気に満ちあふれた生徒のみなさんを前に、日々授業など誠心誠意取り組める環境にあることに大変感謝しています。
- ⑤中学生は可能性の塊です。色々なことにチャレンジして、たくさんのものでごに慣れていってほしいです。何より、自分がやりたいことを大切にしてください。

1年B組

- ①山ノ内町山ノ内中学校―駒ヶ根市立赤穂中学校
- ②アメリカ文学
- ③映画鑑賞
- ④これまでの学校より更に深い内容を学習するという面で、日々私自身学びながら一緒に成長させてもらっている気分です。
- ⑤新しい事や、人にたくさん触れて、自分が好きだと思

附属中学校に入学して

1年B組 竹内 誠

屋代高校附属中学校の受験は、親の方から勧めました。公立中高一貫校で、高校受験がなく、大学受験に有利なのは、この思いからでした。

授業公開や鳩祭などを見学に行き、娘は高校の理数科に興味を持ったようでした。理科ならば地元の中学に行ったら高校受験をするのか、しばらくは悩んでいたようでした。しかし最終的には、娘自身がレベルの高い授業を受けたいという思いで受験し、入学を決めたようでした。

入学してしばらくは、新しい中学生生活だけでなく、通学のために朝早く家を出ること、電車に乗ることなども心配でした。娘も当初は疲れた様子で帰って来ていましたが、「学校が楽しい」と話をしてくるようになりました。

先日、授業公開を拝見し、先生方の指導力の高さに感銘を受けました。私の中学生の頃は、こんなに授業がおもしろかったのだろうか、と娘がうらやましく思いました。

吹奏楽班に入り「演奏している先輩がカッコいい!」、「高校の先輩が楽器の基礎をノートに書いてくれた!」と

「恒例の校歌で新生活を迎える」



編集後記

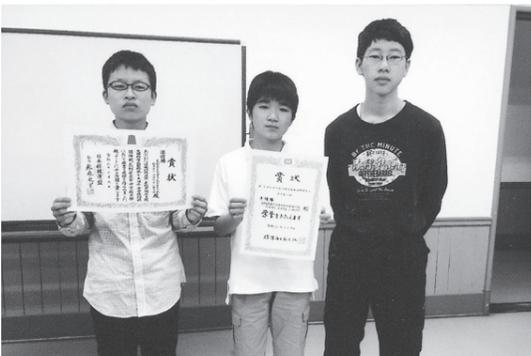
附属中学校の開校あたり創刊した「ユース版」が第8号を迎えました。お忙しい中、玉稿をお寄せくださいました関係皆様には、心より感謝を申し上げます。

また取材については、「鳩が丘新聞」班員（以下の皆様、○印班長）にもご協力をいただきました。誠にありがとうございます。

3年生 ○砂押なつ美、原田航、半田実乃理、坂井日佳理、春原衣沙希、中澤知香、花輪洋弥、丸石千楓、柴田裕司、田村智敏、原 優花

1年生 附属中・高校生を問わず、「鳩が丘新聞」の編集に興味ある方の入班をお待ちしています。（国語科・吉沢道夫生までお知らせください）

第15回中学校将棋団体戦 県大会準優勝



竹本健人(3B)・酒井悠安(1B)・小林克佳(3B)の3君(左から)

第15回小・中学校将棋団体戦県大会（日本将棋連盟県支部、信濃毎日新聞社主催）は、去る6月9日（日）松本市で開催され、中学校の部で、附属中の3君が準優勝に輝いた。

1チーム3名で各ブク代表2チームの8チームが出場して、予選リーグを戦い、上位4チームが決勝トーナメントに進んだ。小林・竹本・酒井の3君は、鎌田中―信大附属松本中―文化学園長野中―裾花中―伊那那部中を連破して、決勝戦まで駒を進め、地区予選で勝利していた信州大学附属中に惜敗した。

酒井悠安君(1B)談「将棋は、母やお祖父ちゃんから教えて貰ったことが始めた。普段はハンドボール班に入っているの、先輩方とあまり打てないが、先輩の優れたところを見習い、竹本先輩は寄せがうまく丁寧、小林先輩は受けが強い自分としては、粘りと寄せに自信を持っているが、もっと技を磨いて強くなりたい。」